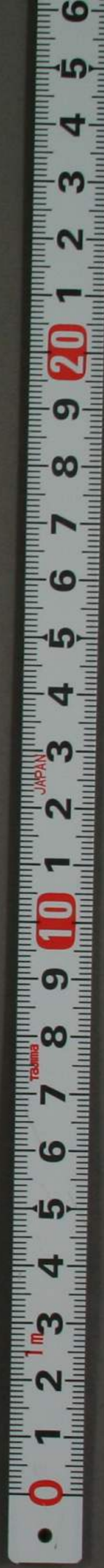




南無阿彌陀佛
第九輯
三十五

イ曾4 特
600
278



48
600
278

下五十三

第百六十四回

重時異同兩姓の逢ふ
義任藁人三勇と先を



這時下總より行徳口へ敵を待つ大川莊に大田小文吾の登桐山八満呂
復五郎等と俱に七八千の兵を率ゐて其地へ赴く程に上總下總の路次にて
ある隊が附く御士豪民の子弟の皆勇むて名を好む者一千二百名を
久既めて莊に小文吾の行徳に到る時這加勢の士卒も皆西股原木の間へ
住めり下總より千葉考胤の壓を市原の御士館持儀杖朝經夷瀨の
御士大樟村主俊故等則ち隊の頭人より原木西股の間より行徳へ一里過
給ふ然に大牙接る處より相救ふ便り宜に角の勢を張るも足れり憊を
後安ろける莊に小文吾も其を儘に人馬を求めてその日行徳へ來ぬれり敢
民業を妨げ又民屋を焼拂ふ地を理に据る塩濱の陣より南へ左の

方ふ當り。茫渺々大洋へ前面へ則西ふ當り。端一箇の大河あり。上る
則利根河也。又是を最末河と云。阪東太郎即是る。其中流を前所と
云。真間國府臺の邊に在る。其次市河と云。下流を今井と喚做。是
より南の海へ朝の早湍の中の一箇の小嶋あり。妙見嶋と叫ぶ者。是より
河畔へ下。今井村あり。河より西へ上。今井村あり。因う河の字を負。其本名
暴河也。是より西東へ小松中川。木逆井。猿江村。五本松。南本所。北本
所。兩國河より西を武藏と云。其葛飾郡也。其邊處々小流あり。村落
も亦ヨリ。枚擧る。違わぬ。南へ則深川。蓋行徳より。西國河まで。
今路と同一。ねど。約莫四五里許。多。然。莊。人。地圖。据。り。小
文吾。同。でも。ある。故。御。り。徳。より。去。向。も。都。て。熟。路。る。れ。も。猶。も。間。謀
見。を。遣。し。敵。の。虚。実。を。探。る。る。這。地。の。寄。隊。の。首。を。出。來。せ。但。妙。見。嶋

と今井河の岸。柵を作り守屋を構へ高く水樓を抗て豫より。あを成る敵の
士卒二三千名あり。河原より柵の頭へ扇谷の兵頭小越小權太表練千葉
自胤の兵頭援嶋郡司將衛是と又妙見嶋の頭人。大石憲重の老黨彦
別夜又吾數世五百個の兵を従へ。水中より千仞を鍊鏢子を張。且。と。
敵の馬脚を套禁んと欲し。又水涯あり。時尚世の早る。大砲を。並
備て。敵河を渉さん。と。前岸へ立。聚。り。敷。き。拂。んと。構。へ。る。准。備。九。層。を
め。ざ。り。し。と。間。謀。見。の。告。る。ふ。より。莊。人。是。を。知。り。て。冷。笑。ひ。り。小。文。吾。の。い。ふ。やう。
這大河の前面。敵の柵の逆より。封疆を成る。與。り。今。初。め。あ。る。や。あ。る。
ね。と。今。の。寄。隊。の。先。鋒。る。ふ。反。り。成。を。固。く。て。破。れ。ど。の。を。欲。する。主。客。の
准。備。表。裏。也。其。勇。る。を。知。る。ふ。足。れ。り。と。い。へ。小。文。吾。點。頭。て。然。と。他。も。あ
地。を。易。て。只。其。成。を。固。く。する。ふ。あ。つ。て。寄。隊。の。大。軍。を。待。ん。と。の。為。る。べ。し。

ありとも我々の則は防禦使ゆく找く人の國郡を奪んそ求ぬあり
ま今若謀計をのろ。那両柵を捕れとる。難くもめぬ枝る。先只館の
御旨を守りて寄隊の大軍と待て一度破れんと。お莊々素よりあの意わ
る。隨即濱邊柵を構へ。且塩濱と今井の上流より快船と維ぐの
爰。長陣の準備して寄隊の向ふを俟。十一月の果敢る盡て土月の
初。ゆるり有り。程。満呂復五郎重時。この陣中。お做とも。徒然
堪。りければ。有一日。獨立して。漫。り。と。ある。程。の。杉。徳。の。左。右。を
川。添。の。村。落。より。所。謂。堀。江。猫。貫。鉄。真。間。関。嶋。新。井。湊。村。河。原。大
和。田。稻。荷。木。之。市。河。不。至。れ。街。衢。同。く。と。の。餘。も。猶。わ。る。を。要。る。け。と。お
備。る。ぬ。間。話。休。題。る。日。復。五。郎。重。時。の。東。西。と。ち。巡。る。隨。憶。を。湊
村。お。ま。け。折。る。蔓。々。丁。々。と。焼。刀。の。綾。打。鳴。を。鎖。の。音。耳。の。响。は。高。か

ほ。と。と。これ。が。這。村。の。坎。稍。盡。處。最。寒。る。錢。匠。が。家。あり。主人。と。お。や。れ。一
個。の。漢。子。年。齡。五。十。有。餘。る。其。子。も。あ。ん。年。十。六。七。る。一。個。の。猴。子
と。相。共。小。鍬。を。鍛。冶。ひ。て。器。械。を。製。出。せ。有。け。重。時。を。今。這。里。お
ま。て。憶。お。其。店。前。お。歩。を。駐。ゆ。簾。お。掛。夾。み。る。出。刃。と。刀。子。を。見。る。皆
是。藤。原。信。之。と。勒。ある。四字。の。銘。あり。又。其。側。の。壁。お。白。土。で。大。多。竹。輪。
内。お。屋。字。を。寫。る。丸。屋。る。べ。と。猜。せ。る。且。其。猴。子。の。逞。び。る。全。身。黒
く。膏。満。る。眼。圓。お。骨。太。お。身。お。傍。の。敗。て。下。短。る。夾。衣。只。單。被。く。と。こ
取。寒。け。た。面。色。を。勝。祖。お。る。兩。袖。を。腹。お。巻。て。裳。を。股。ま。で。引。折。結
き。合。鎖。を。打。り。為。体。都。て。槍。棒。の。お。法。お。稱。ひ。て。臂。力。あ。る。く。見。え。く。
重。時。の。立。も。お。ろ。ろ。其。冷。ひ。果。る。と。急。お。主人。を。喚。て。い。や。う。登。り。其。里
を。漢。子。お。作。り。新。刀。の。お。え。や。あ。ら。我。買。ま。く。欲。を。出。て。見。せ。よ。甚。麻。毛

や。と。同。れ。て。主。人。の。見。え。り。官。人。先。框。へ。尻。を。横。を。先。代。ま。六。刀。鍛。冶。を。
新。刀。も。多。く。ひ。ひ。小。可。其。弟。子。を。木。八。と。喚。ぶ。の。も。老。化。て。鈍。る。本。性。
故。に。技。を。拙。く。い。へ。必。ず。刀。子。を。作。る。と。の。を。重。時。ら。開。て。開。左。ま。れ。右。も。
あ。れ。の。家。號。ハ。九。屋。の。あ。る。竹。輪。ハ。安。房。の。満。呂。の。花。號。ハ。我。の。昔。年。亡。
び。の。麻。呂。小。五。郎。信。時。の。親。族。の。満。呂。復。五。郎。重。時。是。今。の。里。見。殿。の。
仕。ま。り。の。昨。今。塩。濱。の。陣。に。在。る。若。是。汝。が。東。人。の。先。祖。ハ。満。呂。氏。の。あ。る。
る。後。知。や。又。這。少。年。の。骨。相。を。見。て。猜。ま。る。武。藝。を。嗜。む。者。ハ。似。ら。年。ハ。
幾。箇。名。を。何。と。久。後。憑。心。地。を。由。緒。の。や。わ。る。む。欲。し。と。い。ひ。
そ。木。八。頭。を。擡。て。原。來。御。身。ハ。満。呂。氏。の。濱。の。御。陣。より。來。ま。せ。後。同。
と。ま。り。の。恥。小。可。が。故。東。人。も。則。是。満。呂。氏。の。在。昔。鎌。倉。の。將。軍。家。
創。業。の。時。頼。朝。公。に。從。ひ。ま。り。麻。呂。五。郎。信。俊。殿。と。や。ら。の。庶。流。の。い。へ。と。

子。孫。氏。間。の。降。り。の。錢。匠。と。て。生。活。を。と。口。碑。の。傳。へ。の。詳。さ。の。知。を。
い。へ。と。既。に。猜。ま。り。の。今。も。る。満。呂。氏。の。信。之。の。家。の。通。稱。ハ。然。レ。這。子。ハ。小。
可。の。主。助。也。故。東。人。九。屋。太。郎。平。の。獨。子。な。れ。ば。再。太。郎。と。喚。做。し。二。
親。早。く。身。故。り。小。可。年。來。後。見。し。今。茲。ハ。十。八。歳。の。若。然。レ。這。
子。の。生。年。ハ。文。正。元。年。丙。戌。也。且。丁。の。月。日。ハ。生。れ。し。以。致。甚。ハ。熱。性。
る。生。活。ハ。火。を。宗。と。す。る。鍛。冶。の。子。で。い。へ。性。と。て。水。を。好。む。冬。も。漢。
細。七。村。後。ろ。泉。河。へ。身。を。漫。を。る。あ。り。て。反。て。快。し。と。い。ふ。あ。り。て。誰。
教。ね。い。も。水。戲。ハ。自。由。を。な。れ。ば。夏。の。い。く。早。湍。を。數。々。烟。江。で。西。の。岸。ハ。届。
る。小。可。比。林。の。免。毛。な。り。も。所。好。ハ。又。只。是。の。ま。る。角。觴。
白。打。槍。棒。數。ハ。劍。悄。々。地。ハ。其。師。ハ。就。て。學。ぶ。の。う。田。舎。ハ。良。師。ハ。遇。
は。何。さ。や。ら。拙。る。死。技。を。う。秋。月。カ。あ。れ。這。頭。で。ハ。白。人。相。撲。の。最。と。い。ひ。

る。似而非腕極でいへ。親父肖き落破落戸をさぐりやいへ。呵々とうち笑へ。重時只管感て已まむ。再太郎とて。たぐりやいへ。意の優る。這子の本性。今戦國の時方り。莊客され職匠され武藝とて。統袴を求め名を揚家と與ふ。但。那身の熱性とも。冬の日水に浸りて凍る。やうや。あ。二條の信々。と詰ると。木八のや。を訝り。あ。理り。あ。あ。あ。極めて。故。あ。我家五世の祖。ける。麻呂太郎平信。之より相傳へ。人魚の膏油。今。有り。傳へ。云。あ。の膏油。昔。一箇の樽。装れて。塩漬。漂寓り。と。信。之。不。思。議。拾。得。て。秘。藏。せ。り。其。樽。の。樟。木。と。て。佐。藤。葛。を。植。へ。あ。り。其。大。洋。の。漂。と。年。久。け。れ。ば。牡。蛎。海。藻。さ。ら。ぬ。粘。り。人。魚。膏。油。と。寫。る。四。箇。字。の。幽。讀。れ。と。然。る。孰。の。國。の。産。物。也。流。れ。來。ぬ。故。を。知。る。又。何。用。る。と。を。知。る。凝。り。と。蠟。の。像。く。さ。け。と。開。け。終。藏。め。置。け。あ。有。一。年。一。箇。の。頭。陀。

あ。我家。宿。せ。り。日。其。頭。陀。件。の。膏。油。我家。在。り。と。少。知。り。主。人。信。之。不。誨。る。あ。人。あ。り。人。魚。の。肉。を。咬。ふ。と。其。其。壽。三。千。年。と。有。り。惜。る。膏。油。を。齡。を。延。ぶ。奇。効。有。り。遮。莫。是。と。燈。火。の。做。と。風。雨。も。滅。び。て。日。月。と。光。を。同。く。又。人。の。鼻。口。耳。腋。肛。門。都。て。九。孔。に。塗。り。て。水。入。れ。大。寒。の。日。と。い。へ。猶。温。め。凍。る。と。波。と。潜。り。て。海。も。涉。え。又。刀。劍。の。塗。り。て。鐵。を。研。り。角。を。辟。く。べ。試。め。と。い。へ。と。這。信。之。の。時。も。あ。り。刀。鍛。冶。と。活。業。の。件。の。人。魚。の。膏。油。と。作。る。所。の。新。刀。の。塗。り。て。鐵。研。と。名。づ。け。是。を。售。る。果。し。其。驗。あ。り。け。れ。漸。々。お。ち。れ。て。家。傳。の。時。惜。や。膏。油。を。用。盡。し。て。殘。り。三。合。あ。り。は。是。を。兒。孫。に。貽。え。と。則。硝。子。の。壺。に。藏。め。其。歲。月。を。寫。し。あ。と。傳。へ。て。今。あ。る。と。再。太。郎。の。試。み。大。前。年。の。冬。に。那。膏。油。を。身。に。塗。り。て。今。井。河。入。り。て。涸。り。河。水。温。る。と。湯。の。如。く。波。濤。を。潜。る。も。自。由。也。前。面。



る。と半响許さず。と口訥りて。を答る。親心子。甘口。多村酒。の。用。ある。を
知。ね。ども。夜。消。の。與。買。措。け。二。合。半。堀。加。木。厨。より。出。ま。乾。魚。と。吹。草。火。の。炎。
銷。の。碟。子。執。添。て。却。重。時。を。上。坐。お。請。ひ。て。俱。お。献。酬。を。親。子。の。契。り。千。世。ま。で。と。
訖。一。壽。詞。も。憑。心。に。奥。蘭。お。及。ぶ。時。重。時。の。酒。菜。を。え。と。勒。肚。る。長。財。囊。よ。
て。金。坐。を。圓。金。十。兩。を。紙。お。拵。り。便。面。お。載。て。是。を。木。丸。お。贈。り。て。い。ま。う。我。の。其。
詳。多。う。と。知。ね。ども。和。主。忠。信。の。心。の。先。主。人。の。孤。を。守。育。る。甲。斐。も。る。我。今。切。
養。ひ。合。て。且。塩。濱。の。陣。所。へ。お。還。れ。明。日。より。さ。る。徒。然。る。心。陣。中。に。れ。餘。
財。を。お。あ。り。と。薄。義。多。う。の。う。と。這。然。び。を。表。す。の。と。い。ふ。と。木。丸。お。合。の。開。い。亦。要。
る。御。仁。義。へ。這。大。金。を。爭。何。い。せ。と。辭。ひ。て。受。め。ら。る。と。重。時。連。り。推。薦。め。て。い。
掖。も。や。合。ま。れ。木。丸。八。只。得。受。戴。て。軀。て。懷。お。來。る。程。再。太。郎。の。恭。く。重。時。お。
う。向。ひ。て。為。お。其。飲。び。を。演。け。り。當。下。復。五。郎。重。時。の。又。木。丸。お。談。を。知。る。と。く。

敵。の。二。柵。の。西。の。河。原。と。妙。見。嶋。お。在。り。我。再。太。郎。と。共。侶。お。早。湍。を。涉。り。先。馳。り。
柵。を。破。り。思。ふ。が。為。お。人。魚。の。膏。油。を。欲。ま。る。と。い。へ。木。丸。八。異。議。も。る。開。い。と。
易。に。ま。る。と。い。ふ。奥。お。赴。け。り。件。の。堀。と。半。堀。又。再。太。郎。新。に。綿。入。衣。を。被。更。
さ。る。故。り。る。兩。刀。を。遞。與。り。て。い。ま。う。あ。ち。是。海。が。先。祖。より。傳。え。ら。る。什。物。な。れ。ども。
數。世。用。ら。れ。ば。藏。措。れ。其。甲。斐。あ。る。と。今。日。より。主。共。侶。お。せ。ま。る。刀。お。恥。く。忠。孝。の。
道。を。喪。ひ。ひ。と。論。其。再。太。郎。受。戴。て。そ。う。あ。る。と。い。ふ。親。お。存。り。親。お。恩。と。
返。さ。り。別。る。と。も。義。父。大。人。の。底。より。武。士。の。數。お。入。る。と。必。安。房。へ。迎。り。て。反。
哺。の。本。意。を。果。ま。る。と。い。ふ。木。丸。八。領。の。胸。疼。け。れ。答。の。せ。涙。と。共。お。人。魚。の。
膏。油。の。堀。と。卒。と。い。ふ。お。遍。與。せ。重。時。怡。悦。お。堪。え。其。心。操。を。謝。り。告。別。て。
身。を。起。さ。る。と。い。ふ。程。お。門。傷。お。立。る。那。童。男。の。遠。く。聲。を。被。て。聲。を。被。て。聲。を。被。て。聲。を。被。て。
咽。林。の。や。並。投。捨。て。内。お。入。り。て。重。時。お。向。ひ。て。い。ま。う。い。ま。う。一。時。の。幾。番。御。目。お。

被り一日のわけを今に述べて面をたれ。料を那里へ来り折這里を主人と問
答。名告のり。知れぬ。小父は我先父の義兄弟。満呂復五郎王。是
徳久己の安西出来。介景次が獨子。安西成之介。是れは豫知せぬ。我身
母の俗縁ある上總。山中村。折塚の邊。遠山寺と喚做した。山院の住
持。養れて年来。喝食をゆり。一。是れ我父。出来。忠義の爲。素藤と刺
す。欲あり。事成。其里。命を殞。と風の便り。あやう。ち。歎。て。ゆり。
ある夜。夢。奇。生。あり。親の聲。歎。と。わ。り。て。成。之。介。知。る。今。番。里。見
殿。大敵。あり。錦倉。の。兩。管。領。合。縱。連。衡。の。大。軍。と。て。水。陸。より。攻。伐。ん。と。我。義。兄
弟。満呂復五郎。大川。大田。兩。將。の。も。練。れて。必。行。徳。の。陣。在。ん。汝。那里。赴。て。
復五郎。應。て。役。從。へ。倘。幸。ひ。て。軍。功。わ。り。里。見。殿。仕。ま。る。我。志。と。紹。ふ。
足。ん。勉。よ。か。と。思。ふ。思。へ。愕。然。と。て。敬。馬。に。覺。け。り。覺。て。の。後。胸。裏。に。其。聲。ハ

尚。蠅。々。と。耳。邊。に。在。る。お。似。れ。ぬ。歎。の。中。小。勇。れ。て。正。夢。と。思。ひ。一。刻。師。の。坊。に
告。知。て。身。の。暇。を。請。ひ。け。師。の。坊。允。り。ぬ。只。得。意。衷。を。寫。送。て。情。地。旅。の
准。備。と。多。夜。紛。れ。亡。命。と。且。れ。走。り。暮。れ。宿。る。通。路。の。艱。苦。と。厭。む。今。日。稍。塩
漬。の。陣。所。來。て。則。御。身。を。尋。ね。小。漫。行。を。せ。れ。や。ん。那里。も。ま。ま。と。思。ふ。り。ち
な。ぬ。て。料。を。も。這。里。在。ん。と。知。る。の。満呂同宗。の。義。兄。は。子。を。養。ま。欲。玉
ふ。其。要。談。の。最。中。氣。に。仿。る。名。告。も。せ。言。の。果。る。と。思。ふ。は。義。兄。は。使。る。と。思。ふ。御
身。小。父。へ。猶。子。と。寄。り。て。這。番。の。役。俱。一。の。光。と。増。ん。玉。柳。等。か。と。思。ふ。我
二。親。も。草。の。原。を。歩。む。宿。世。鈍。多。劍。大。刀。身。の。脚。鬼。の。山。院。小。生。育。り。物。部。の
八。十。宇。治。河。を。疎。け。れ。夏。の。日。消。一。年。毎。山。河。の。水。を。戲。れ。て。咽。だ。と。言。と。あ。り。一。の。の
暴。河。を。涉。さ。も。後。ろ。の。思。ひ。は。是。れ。果。敢。る。技。を。二。箇。の。本。事。の。立。て。願。ひ。と
遂。さ。ぬ。と。説。く。言。葉。の。露。も。清。心。に。見。れ。て。直。と。額。櫛。板。席。の。塵。埃。を。洗。ひ

流きまふ涙坐おれし思ひを又這奇遇かきとる駭に木戸八再
太へいり重時へつとぞ感嘆大なる成之介の額と推抗は得と
見て現穉顔お覚ある出来か子でわうよ叔も大にうける哉汝が親の末期の
筆お寫貽されし我一日も汝の思ふあなれども曩も素藤と對治の
折我身深癢命危く療養某餌月を閑し久し屏居てあける先月
院に至りて刀瘡を愈へ又軍陣に従て往る日あはれ汝の親の
送言と便便宜なりし其志親お方らむ忠義を紹ぐと十五足角の
角の身さへ命とぞ今番の軍役に従んそ玉鉾の路震に上總なる山
中村の山院より我を尋てあはれし得親の子にけり出来介の義死の折館の
御尋ありし我既汝の事と言上ふ及び御執立ありし其御内意の
えかきも是より後云云と事言れし件の一爰再度の御沙汰るもの汝の親と

共侶の義使の與ふ命と捨り。南弥六の養嗣増松の例もあはれ憑て當陣の
両大將犬川大田の懇意必や用ひられん年々幾あるをと向へ成之介然し今
茲の十二ふける宜く憑てなる。あはれ袂と折返して情と感涙と推拭へ重
時さりと慰め却木戸八と再太郎成之介と引會え甲乙俱々重軍。奇
遇を感し且歎いて迷ふ憑て思ひけり。當下重時又いふ我今日漫然獨陣中
徒然と慰る為のるを情地今井河の流端と撈と欲するものあれ然と料せ
あはれ来て同姓の子を養て且馮河の奇某とゆめ多く幸ひるふ這義甥の
束つふ逢ぬ歎ひ何う是ふ優へん早く陣所推乃かて我兩將を免許と請んぬ
とふそが誰か誰か勇まざる再太郎の膏油壘の袂裏を引とる家傳の両刀を
腰に帶て成之介と共侶木戸八を告て遠くも重時の後を跟て出てゆく留難
なる木戸八も門傍に立て目送りけり。倭而滿呂復五郎重時ハ件の兩個の少年を俱く

塩濱の陣かゝる多。隨即大川莊介と大田小文吾と有り事の顛末を詳に告げて。請を成之介と再太郎と見せしむ。莊介小文吾感謝して。詞意を賞さる。安西公衆の孤の豫館の御仁慈あり。其美及れども。日荒磯南弥六の後と。火臺の助役ある。有佳れ。這安西成之介の孝義武勇の心操を。今館に上る。必是御感あり。軍役充あつ。那増松の。然ども洲崎の御陣。路近。那増松の小事。火臺の注進の。異日の便宜据んの。又その少年再太郎の満呂同姓の義を。復五和殿の養嗣せ。欲する。願ひの趣。亦奇遇あり。人として後。第一の。聖經本文あれ。其情願免許疑ひ。其折を。復五郎和殿の。小腕小相。拵を教て軍功あり。御感八八増。誠。珍重。祝して成之介。両刀

と身甲と與へ又再太郎も。礼を甲冑と取せり。登時莊介又。這安西成之介の先父出来。景次の志を。紹者。今より字の之の字を。省して。就景重と名告る。又再太郎も。実名。敵陣。時。名。不便。信重と告る。安西景次。則那家の通稱也。信も亦麻呂。信俊より。世々名。義紹。一字。甲。是。加。重。字。と。俱。重。時。道。世。表。亦。と。解。示。再太郎と。就。介。相。飲。言。義。重。時。急。推。林。於。莊。介。向。ひ。て。他。者。為。過。分。に。御。意。承。く。い。も。在。下。何。の。德。あり。其。美。預。ひ。や。願。ひ。面。君。名。の。一。字。と。他。者。授。け。る。子。孫。の。榮。也。面。目。上。の。い。で。御。許。容。れ。り。と。請。を。莊。介。と。不。不。我。們。が。名。の。靈。玉。の。八。の。据。る。者。れ。分。ち。て。人。の。授。け。り。和。殿。の。他。者。親。品。を。と。謙。遜。辭。讓。人。の。口。誼。

要るものなりと諭せしが小文五郎も亦承けり。物本末あり事終始あり。再太郎が本
満呂も在り。就人始り。重時が据り。さるといふべし。然るに他人の名字を乞ひ
本を棄て末を欲り。始を思ひ終に就く。事の宜しきか。名を取ん
実を取らぬ。と云れ。重時脱る路を。就人再太郎と共侶。其款びと演り
あつた時。大川大田両將に従ふ。當席に在る者の登桐山八良千等。皆是腹
心。さぬはれ。重時の又膝を找め。其父と小文五郎告る。在下。今日料を
も。這再太郎が家。あつた。人魚の膏油を。さぬはれ。あつた。膏油を。人の身の九孔に
塗ると。水入れ。今大寒の時。とも。敢凍え。溺ると。海を自在に歩むべし。
経験の再太郎が。既試ひ。ひ。実の奇甚。とのへ。惜ひ。其膏油。今ある所
を。一合。あつた。を。士卒に配分。あつた。は。在下。親子と。就人
も。三箇。用る。足。豫の館の御旨。敵の推寄。あつた。待。找

ひとを許されねども憚りながら愚意をとり量る。今目前の敵の三柵を破り
 河を渉りて寄隊の胆を挫く。全勝の勢ひるべし。豫て義を思ふを以て奮
 身軍を立て。土民を問う。河を渉る。義を思ふを以て奮
 も夏毎の溪川の水を戯れて。四谷を渉りて。在下他を相伴ふ。今
 宵悄地河を渉りて。敵の柵を放さず。登時両君快船を。一隊の河上
 より前面渡りて。敵の活路を殺し。壑に一隊の徑を。今井河より。所へ
 攻伐玉を。唾して。敵の頭人をも。虜あせむ。易く。あつ。議を。儘
 む。と言ふ男。多く。薦れ。小文五口。の只。點頭。く。の。も。許さ。あ。う。ざ。れ。も。良。干
 考の皆是を喜して。良策とを思ひける。その中。中。井。人。の。件。の。言。の。趣。を。听。果。て
 却。我。の。亦。豫。より。其。義。を。思。ひ。さ。う。あ。わ。ね。も。館。の。御。首。あ。を。り。き。今日
 は。も。寄。隊。を。俟。て。徒。日。を。過。せ。只。戰。飯。を。費。さ。る。謀。る。者。不。似。し。

然先那柵と破て河を渡して敵を俟た。寄隊と戦せし。他が勢ひを折る足人あれども那二柵とせし尚稀き大銃の備あり且究竟の弓も多しと噂り然るに漫の攻伐は自家の戦歿する處と思ひ入て黙止ふ。滿呂生然奇策あり。是の便宜といひて。遮莫漫の掃るべし。今宵我唐の張巡が段の傲ふて。藁人を船に建て烏夜の来して突然と敵の二柵を推し脅して他が前を令り。銃を以て然るに那柵の頭人等が詭計を施し後悔せし我士卒又後の夜に船を那里漕ぎて亦復柵を脅さる。敵の必先度不慮りて前を射さる。銃砲を禁めて倒れ由断せし是必然の勢ひ其折るを復五郎和殿の這少年も從へ。悄やふ河を渉して敵の柵に火を放ち。攻め敵を拂ん先藁人の計を以て。敵を懲りて弓箭火銃を禁め其失ありと論其重時信服

を。妙計とぞ感づけ。その計ひを相歡ぶ登桐山八良干の小文五郎白ひて。在下近屬軍書の講を以て。元人東都の羅貫中が三國志演義に載ると云那魏公曹操が呉の孫權と攻伐を欲しける。赤壁の戦以前に呉の都督周瑜が胸狭くて劉玄德の軍師をけ。諸葛孔明の才を思ひ故に猛可の數萬の箭を求めて其前約束の日と違ふ。速に作りし。其罪を以て斬らんとし。孔明輒く諾りて敢て困る。面色せむ藁偶人を多く作りて舟を數十箇の艦に建て野干玉の夜の深し時候に敵の守る城ある所の江邊迄漕ぎよき。鼓を鳴り。関の鼓聲を揚げ。俄然として攻むるべし。勢ひを示せし。城の士卒皆驚馬に課せ。前を射せし。風が横吹く驟雨より。敏然と折れ。其藁人ふ立ッ。幾萬幾千條る。と知る。既ふ孔明の思ひの隨に敵の面前を得て。船を漕返さる。其前數萬あり

まゝのちあつて。○周瑜の與へる周瑜の其智を我を折ていふ。媚く思ひたゞの。○是
 る。○則周瑜の與へる周瑜の其智を我を折ていふ。媚く思ひたゞの。○是
 演義の趣へる今犬川主の舌を説く。唐の張巡が段々微ふと宣
 ひ。○あるなり。願ふに誨えぬ。○と向ふを小文吾うちて。否我の只武を宗と
 する。○文字の大塚犬川及びてもあつた。○其舌を考る。○犬川序次
 うちて。人の疑ひを解き。○といふ。其微々然。○羅貫中が三國志演義の
 一書の虚と実と相半して。作り設け。○少くも。○譬目。○今登桐の。○孔明
 が敵を計りて。數萬の箭を合する。○素より陣壽が三國志の中。○又宋の司馬
 光の通鑑の中。○因る唐書を按ずる。○ある唐の張巡の故事。○西羅貫中が撮
 合する。○那張巡の唐の忠臣。○玄宗帝の時。○安祿山が乱る。○唐の諸臣位高に
 も多く。○賊の降り。○惟張巡の孤城を守りて。死に至るまで。○敢屈せぬ。○竟る矢種
 彈に。○張巡則苦累を縛ねて。人のよく作成者。○一千餘。○是は黒衣を被せて。

以夜縋け下ま潮兵潮兵 賊兵より。争ふてこれを射る久して乃其蔓采人を引揚
 還せし潮兵の箭十萬をゆる。その後復人を縋け下ま賊徒笑々備せ設け
 乃死士五百を以進ず賊の陣營を斫る潮軍大く乱れり遂に
 幕を焼て奔ると追ふと十餘里以下と唐書第百九十二忠義列傳張巡
 傳ふ見えり近世天朝あるの謀倣い。惟千早の楠是の忠義も張
 巡と拮楸して楠公猶勝れり。他那演義ふ見え。漢中の関戦ふ孔明が
 城の門を開けて反く曹操を退けり。其実に孔明あらず。則是趙雲
 趙雲の外。門を開けて敵を退けり者。唐の時もこれあり。李謹行即是
 事の唐書第百十。李謹行傳ふ詳々又孔明が南蛮攻ふ獅子を作りて孟
 獲の使ふ猛獸を權て追奔せり。其説の所別は父母ある富言ん
 憐るる言れども。あふ要るれば具ふせ。異日別識まべ。蓋士君子の稗史物の

毛鶴山三
國志評注
金聖歎
外書
是名
實之
金聖歎
評注
國志
毛鶴山三

本と悦ぶ。是學問の餘樂の先。眼と史傳を晒して其見るところを博くさ
れ。誰の虚実を分別して作者の隱微を發明せん。あやうと今酒家の敵の
箭を合する故事と談する。三國演義を取ぎて唐書の張巡傳を引る。然
ちで疑ふところと解れて感ずる。良干重時就介再太郎に至るまで耳新を思ひ
ける。當下登桐良干の莊にふち向いて言の勢を演じてゐる。今介初めとさ
ども和君等八人の天授の才を生れり。知らぬあやう。今戦國の時方々武
備のゆゑ文学まで自得の如く至るや。感心の外にわざとを并にせしめど
否と。我の甫の七歳で逆旅の母を喪ひ。大塚墓六の小厮にせしめど。
身の最賤。かけの不幸。やうく大塚と情地の友垣を結び。その人の帮助よ
す。和漢の史傳を見るをえ。文の犬村大坂あり。又大江あり。大塚あり。
我々及ぶ所あり。ぞ井を鑿りてとらんと卑下まで。餘談及びける。問話休題

公程の犬川莊。犬田小文吾の日の猛可。士卒下知。一。葛原人一千有
餘を作ら。其偶人の外を堅くして内を空虚。是則外敵の策を
受く。内敵の鐵砲銃丸を受納。せん。既にして其陣。日。都々
作り。是。細衣を被せ。船四五十艘。分ち載。士卒。其陰
在。這艦隊の頭人。登桐山八郎良干。満呂復五郎重時。並。満呂再太郎
信重。安西就。景重。相従。艦。每。難。兵。舵工。共。千名。過。りけり。
あの日。十二月初。日。入れ。黒。白。も。真。夜。半。時。候。妙。見。嶋。と。西。河。原。の
敵の柵。近。く。潜。よ。き。諸。艘。一。度。夷。然。と。攻。鼓。と。打。鳴。ら。し。因。の。聲。を
發。け。葛。原。人。の。陰。より。火。銃。を。發。ち。箭。を。射。出。し。突。然。と。攻。入。ら。す。
欲。し。其。勢。ひ。を。見。る。程。二。柵。を。守。る。敵。の。頭。人。援。嶋。郡。司。將。衛。小。越。小
權。太。表。練。彦。別。夜。又。吾。數。世。の。士。卒。と。俱。み。敵。の。三。實。を。す。

見定められれば只破れを構へ攻めの音聞の聲をききあひ各相争ふて鉄砲を發ち登前を射る。雨霰より鐵索よりければ敵は挽き去らざりて相挑む。三响許天の明えとある時候良干と重時の徐に諸艦と潜返させ那里の首尾を莊々と小文吾の報知し却其詰朝萬葉人お立ち登前を合ふ。約莫二三萬條あれば又萬葉人を解て内より一銃丸を合ふ。其銃丸二三斗ありければ勞せざりて得ありと笑む者ありけり。徳而十二月四日。あの日廿八小文吾の良干重時信重景重の諸士を集合て示さる。衛洲崎の御陣より遣され快船來着て大阪大山の奉書あり在り。敵の月八日の曉天の水陸俱に推寄せ。勝負を決まると云既其後を。あつたふの地へ向ふ敵の軍兵も今日飲明日は必死と。因る其使者詰茂佳橘等の幸便縁り。復五の情願並に再大就の事の趣を大阪大山の

消息きて件の御使船と返る。必死と上らる。却今日の軍議を別事ある。敵の二柵を頭人士卒の昨宵銃も計られて多く前玉を費し。れ。今宵又船を寄るも。徳の備を做さる。其懈する時臨して諸艦一漕を短兵急の伐破れ。但二柵の汀渚より十間許水中。鉄の鐵索と張耳て。觸械と速り。馬脚を掛駐んと構ふと。昨夜我艦其里まで届ら。あつた。今宵我艦も必。件の鐵索と踏む。柵の近づく。あつた。あつた。小文吾も亦是を談る。軍議脱落するけり。登時滿呂復五郎重時の突然と我と出で。則二天士朝ひて。其水中る鐵索の事。昨日告稟。あつた。人魚の膏油の奇甚あり。是をり。刃の余れ。數百斤の鐵。あつた。府を研る。易いといふ。是をり。今宵の満踏を在下許。再大就

介を相伴ふて。悄地の今井河を咽で前へ歩いて。水中の鰐索と断つ。且柵の水門より潜び入て火を放ち柵を焼て。暗晝と仕んく。這義を。あめをと思ひ入る。請薦れ。莊介有理と領て。其義定宜一からむ。縦柵を攻破るとも。善悪も別ぬ。鳥夜なれば。不知案内の自家の與。進退不便なるを。和殿先柵を焼く。并に燭をて漏る者なく。必敵と亡まへ。柵の頭人衆兵。昨夜の懲り。備をせよ。と思ふ。元自推量の。猶小心あくる。和殿。今宵先柵を。悄地の河を渉をも。只その功を貪り。漫に端ら失あむ。勉強なれ。敬言れ。重時の忻然と。歎じ。堪えられ。言義も退け。悠而大川大田。兩將の俱。今宵の隊配と。做さ。莊介の千五百の兵を。西河原の柵を伐破る。又小文吾も。千五百の兵を。て。妙見嶋の柵を破んと。五日の日暮まで。俱

數十箇の艦を。汰へて。悄地の。餘の衆兵を。留め。塩漬の本陣を守り。登桐山八郎良干と。頭人と。那二柵を破り。後徐に河を渉。せえ。為。有。悠。程。満呂重時。再太就介と。共侶。甲夜。先駢の準備と。る。先。那人魚の膏油と。て。各。帶。る。両刀を。援。出。て。塗る。と。幾番。る。と。知。る。の。餘。の。二。個。の。一。身。九。孔。都。て。漏。さ。る。塗。る。と。肌。膚。光。澤。や。る。膝。理。細。く。做。り。て。寒。氣。を。覺。む。惜。む。べ。い。ヨ。ろ。ろ。ぬ。膏。油。の。あ。つ。き。盡。た。け。り。悠。而。這。義。父。子。義。任。の。俱。牛。の。項。草。と。り。綴。り。る。身。甲。を。鰐。皮。の。針。脛。衣。膚。の。鰐。索。を。被。る。の。腰。の。跨。る。兩。刀。を。波。の。合。れ。と。吊。緒。と。掛。て。帶。り。係。に。重。草。の。燐。臺。を。各。脇。の。邊。に。楚。と。夾。て。水。の。入。り。も。濡。さ。と。ま。り。既。而。て。の。夜。中。の。左。側。に。下。今。井。より。二。三。十。町。許。の。河。上。に。造。り。て。ち。連。り。と。暴。河。の。入。る。現。奇。某。の。效。驗。違。ひ。今

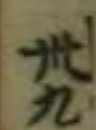
宵に寒風沙を飛し波濤起噪に且流早ければ音も少く水の勢いも水
海夜闇に入る心地多き堪がらんと思ひ水も入るに倒れ其温るを
湯の如く且暴波を被れても呼吸自在にして地上も異るに淪れどもあつ
ろ身も浮く潮も易く再太郎の夏の日毎に這累糸河を渉るる推
流さるるもあらず重時も亦上總る海濱あつ水も熟する甲斐ありと
亦俱におよみ獨就かゝる尚未熟なり這累糸河も堪ざらん動もまじ
流さるる重時再太郎相扶けて妙見嶋と西河原の柵の間を河中洲ある
処へ来ふけれど這頭の都て浅瀬にて僅不足の立どもて共侶の一霎時憩ひて
猶も便宜とゆき欲する重時の豫より就かゝる再太郎も悄語にて事のあらを
ゆきまじき妙見嶋の小敵へ西河原の柵を焼く那里へあつらん乱れ走ん
再太郎も那邊へ張垣する水中の大鰐索と斫棄て自家の艦の去

向を用ゐね我の汝も先さへて。獨西の柵近つて。潜び入る。元便りあらば招
にこそ俱せし必惴るべしと諭を就て。再太郎のあつるをわの切れ找
まも權且ある憩あり。水より上あがる者の口は是三個の乳より上のも。仰
ぎて天を瞻れば霜霜満星星光めめ。友喚ぶ知鳥の聲きき。誰思ひ難く
妹許り。河風寒と冬の夜の闇。目に見るものも。憊而在る。元あ
されば再太郎の又悄や。妙見嶋のうら。涙はと果して柵を去る。と遠く水
中。張旦。大鰐索。両三條あられ。躬て腰を。脱ぎ。是を斫
る。奇菜の效神妙なる。宛草蔓を。其る像。力を入。ぎ。断れ。けり。
有。悠。一。程。重時。ハ。就。衆。を。測。留。めて。身。單。又。急。流。を。凌。び。て。西。の。柵。近
つ。あ。あ。亦。水。中。の。張。旦。一。鰐。索。あ。れ。の。腰。刀。を。ぬ。き。是。を。断。つ。皆。其。刃。の
隨。て。斫。ら。れ。て。水。底。に。沈。み。重。時。深。く。心。を。感。じ。て。人。魚。の。膏。油。の。大。奇。大

效用する所一も違ふ惜哉是より自家の士卒に配合せられ我がものにて
後竟お世の人知る由あるべしと思ひ猶近つて水門より柵内へ潜ひ入る
くも程七八間あり一時思ひ立ち柵内より檣と發する大砲の聲に
重時ハ半身並粉砕打碎れん水火激る殺伐の音共侶の波の底に淪
果て水屑の微ら三魂早く天に歸り六魄既地に入るを常迅速今も
らる就介の吐嗟とむらりあち敷鳥の透し見る果して小父の打碎れん
波の寄る人あち敷何れか命運薄き仇を量り今宵の先
馳五十歩百歩の間を至りて杖に憑きて来り甲斐もなき世にあらぬ死
人の終りの果敢る事悲しむるといへる音を立ね敷人の涙珠成を歎
きてせぬ術知を在り程満呂再太郎信重妙見嶋の柵近に水中大鰐索を
皆斫捨る水音を波も起る引返を方寸委る孝順義勇さる



親の俟らると思ふ心の急れて就介が隠し居る舊の洲に復咽はる則事の
凶変と就介が告を聴て胸淡れ勢ひ折て俱に哀を堪え返る云云
と悔て且ち歎くと思へ計の要所を知る進退をふりて慨然と
半晌許儘せぬ世を任する真愛を知るや且云の鐘聲幽かなけり有悠
て程大川大田三隊の戦艦數十艘昨夜のどき果人を建る艦五六艘を
先めて分れて件の三柵へ悄々を来りて再太郎が就介と俱に透る
見へ他那艘响へ自家の艦の既潜るを来りて我大人空々たりと我
們の存在を放火の約束と違へ戦ひ竟る合期せ自家敗軍及
んは是も亦知るべ然るは是大事を祈る我々が罪免れさなり幸ひ
饒さるも其折何を目め我両將小見んや左ても右ても死を免身先
や柵内へ潜ひ入て折も火を放さ敵の用心堅固を其事倘做る一人



とも敵と殺して共侶の戦殺せし今に躊躇ふと性起る武勇の獎する就
 以有理と感激して開の勿論の事から意ふ那水門の内守衛の敵兵を
 小父矢場を敷き然る猶懲りざる又那里より入る欲其前車に警を
 思ぬ不似る。あゝ甚麻と説かれ再太郎も亦領て然る愚按も其頭は過
 因て意ふ他那西の波稍盡処より右の都て柵の助を守兵必稀多べ
 矧亦那柵内より水上に垂る老柳一株われ開て樹を潜ひ入る期は後れ
 背隊とも敵の用心那里も届て由断るを誘ふといふせば就に這議
 従て敢又尋思ふ及ぶ心術一對武勇の少年傳は多く中波の浮沈を
 つ立因りて柵の背隊は近にけり畢竟這面少年が怒不堪死を極め
 考義の先駈果さるや否や開へ又下回解分るを聴ねが。

南總里見八犬傳第九輯卷之二十五終

南總里見八犬傳第九輯下帙下乙號中畫工筆耕彫匠名號目次

出像畫工 玉蘭齋貞秀 

淨書筆工 谷 金 川

卷三十三 澤 金 次 郎

卷三十四 常 盤 園

彫工 三十四下 澤 金 次 郎

卷三十五 常 盤 園

三十五下 澤 金 次 郎

南總里見八犬傳第九輯下帙下乙號下編五冊大圖圓

本傳第九輯下帙下乙號下編五冊大圖圓 當年内續出
 乙号則十五冊にて結局に至れりこの中編既刊約 訖ぬ乙下編もも續いて全備とせり

新書 中本第一集三冊 玉蘭齋貞秀画 来子の年出版
 翁の中本の作の文化以来より本房より求めて僅一作あり

開卷驚奇俠客傳第五輯 延引せり今八犬傳刊刻の故より
 刊引せり今八犬傳刊刻の故より 延引せり今八犬傳刊刻の故より

八犬傳 卷之二十五 五冊近刊

近世說美少年錄第四集五卷

この二書も中絶の俠客傳不同、犬
傳結局皆板の後必死出さず、近刻

著作堂一夕話

公翁の隨筆である物な是と一席話と録し又亨の雜の記と雜交記とあつて中世の事と傳訓を附けらる甚だ誤る。○初集大本三卷近刻

右曲亭翁の新編本房近刻の者と畧記を江戸書林 文溪堂正舗藏板

曲亭翁精編八犬傳の二書を全本九十有二冊百七十回にして結局大團圓至
ると云ふ内中第百六十二回以下所云第九輯下帙の下乙號の下編五冊も陸續
刊行せしむる全璧と云ふも翁二十六年の腹稿大筆和漢との外はな
所最勉むるといふべし刻板全部本房藏弄佳紙良刷製本美々甚矣賜
顧の君子全備既ふ遠く後板の要を俟ぬか
書林文溪堂敬白

○家傳神女湯

一包代百銅

○熊胆黑丸子

くまのいけをのりて丸ま
かやくのりをまどへず 一包代五下

○精製奇應丸大

葉功能く紙をふさぐ
包代金葉朱中包代二枚下
包代五下をたる不仕

かへん小あづかふくをあらでその

ひふふふいなりきう家傳の
さう百ぶあさる林のど

○金匱救命丸
如金匱

香一色平八文黑
本御林氏製

油美垂香一頁四十八文

江戶京橋南邊町三丁目程坂本氏
町三丁目書肆丁子屋平兵衛

後板五冊推して出版全部相揃ひ年々初輯より皆揃出候

天保十一年庚子年春正月吉日發行

京都三條通東洞院東へ入

大文字屋得五郎

大坂心齋橋筋博勞町

河內屋茂兵衛

大坂心齋橋筋唐物町南入

河内屋太助

江戸小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛板

八代傳乙昇卷三十五

四十一

○文溪堂藏

